

# 平松茂男氏追悼

一通の手紙

平松さんの思い出

小嶋一郎

この八月三日、高野公彦氏からの電話で平松茂男さんが亡くなられたことを知った。七月五日のことだったという。大正一〇年二月九日生まれなので、一〇〇歳五か月の生涯であった。

先の大戦中、ベトナム南東沖で敵の魚雷が平松さんの乗っておられた艦<sup>フナ</sup>に命中し、九死に一生を得られたという話は広く知られている。また、そのことが平松さんの歌の原点であることを自らの歌集の「あとがき」などに記されている。

平松さんの長い歌歴や膨大な作品を論ずるのは私の役目ではない。古い話であるが、ここでは平松さんの強烈な思い出

を一つだけ書かせていただく事にする。

それは昭和五〇年代の初め、私が「その一集」に昇級して間もない頃の事である。「平松茂男選」で二首しか採って貰えなかったことがある。がつくりとしていたところ、三日後に平松さんから直々の手紙が届いたのを覚えている。

「覚えていて」というのは、この機会に平松さんの手紙を読み返そうと、家中を隈なく探したが見つからなかった。三〇年前、家を改築した際のどさくさで行方知れずとなったのだと思う。しかし、その手紙の主旨は忘れていない。

「君の歌は素材の事象報告に終始して深みがない。素材は歌作りの一次的な動機であって、そこから作者による二次的心情や感動を創り出す作業が始まる。君の歌にはそのプロセスが見えない。二首しか採らなかつたのは、喝<sup>カク</sup>を入れたつもり。精進して欲しい」。

選者と名の付く人から手紙をいただくのは初めてのことで、心のこもった文面に感激した。選者は会員の作品の良否を選別するだけではない。会員一人一人を本物の歌詠みにどう育てていくか、それが一番の仕事なのだと、このとき改めて知った。落胆が希望に変わったのである。

平松さんの訃報に接した日、この伊万里の地から東方二五〇キロ、大分へ向かつて合掌した。

あの日の「遠いなあ」

羽田野とみ

7月26日、朝の電話は平松克子さんからである。「もしかして先生が……」。どきどきとして声を待つ。「義父<sup>ちち</sup>が、7月5日午後9時23分老衰のため逝きました」。

100歳と5か月。大往生でした」。やっぱり……。涙が溢れ出た。

家島の自宅から程近い、胃瘻の注入できる施設に入られた先生。「コスモス」の仲間と、お見舞に伺ったのが最後までなる。言葉を出せない先生の、腕を撫でて上げることしか出来なかった。「克子さん、五年間よく先生の面倒を見て下さいました。有難うございました。」電話を切った後も、涙が止まらなかった。

平松先生との出会いは、「西日本文化サークル」に入った時からである。二年



ひらまつ・しげお

大正10年大分県生まれ。昭和28年「コスモス」に創刊号より参加。昭和36年コスモス賞、昭和60年O先生賞を受賞。歌集『鸚鵡島以後』『喜屋武岬へ』『過ぎゆく』『黒蝶貝の海』。本年7月5日逝去。

後、新聞社の都合でサークルは閉会。

「羽田野さん、短歌を続けないですよね」「いいえ、やります」「じゃあ『コスモス』に入らなければ」。それは、忘れもしない平成5年春のことだった。以後、コンパルホールでの毎月の大分支部歌会に出席。引き続きご指導を仰ぐことになる。旧陸軍の兵士だった先生に、軍人特有の実直さを感じた。

平成15年暮、マンション4階のわが家で先生にご指導頂く歌会発足。会の名は「白秋の童謡の中から取った「すかんぼ」にする。9人の仲間が集まった。平和公園でのお花見吟行、別府一泊の忘年会もあった。先生は、持ち歌の「あざみの歌」、台湾兵役時代の「サヨンの歌」を、懐かしそうに歌われた。

平成20年12月、「すかんぼの会」の日である。エレベーターから出て来られた先生が足を止め、両手を杖に置くと「遠いなあ」と一言。先生の腕を支え、奥から2軒めのわが家へ向かう。「これ以上ご無理をおかけ出来ない」。私は、会を閉じる決心をした。

いつも先生が掛けておられた籐椅子の、やや右に傾いた背凭れ。一首一首丁寧に

指導して下さった日のお姿が浮かんで来て、切ない。「コスモス」は白秋ですから」のお言葉も忘れない。今はただ、先生のご冥福をお祈りするばかりである。合掌

師父平松先生

佐野弘一

平松先生の突然の訃報に接し、落胆と淋しさと胸がいっぱいです。支部の中で、御指導戴いた期間が最も短い私ですが、父を早くに亡くし、二十歳年長の先生は正に師父と呼ばせて戴くような存在でした。

私が先生との御縁を結ばせて戴いたのは定年後の六十四歳から始めた地方新聞の先生が選者をなさっていた読者文芸欄への投稿で紙面での御指導のみでした。

そんな私が初めて先生にお会いしたのは六年後の読者文芸コンタールの式場でした。小柄でがっちりした体軀の古武士然とした印象でしたが私の作品に温かい肌理細かな御批評を戴き今後も先生の御

指導を受けたいとコスモス大分支部参加をお願いしました。

歌会での先生は決して体調は万全では有りませんが、会を楽しみにしておられ明解な御指導を戴き毎月の歌会が待ち遠しいものでした。

歌会での御縁は短いものでしたが、デパートへ歌会后買物に御一緒し車椅子を押し階を巡った事や、お宅に御邪魔して歌集を戴いたり、私の母校に小学校三年生まで在籍しておられた事などを知り親近感が増したものでした。

入院後御見舞に行くとは大変喜ばれ、短

平松茂男は生前四冊の歌集を刊行している。第一歌集『鸚鵡島以後』は、昭和四十年に刊行されている。巻頭の「鸚鵡島私録」には、南の島での過酷な戦争体験が詠まれているが、体験を声高に語ることなく、静かに己の体験を語るといふ歌が多い。しかし、これ以降、戦争体験の歌は、時折記憶の底から浮かびあがる

い時間の中でいろんな事を話して下さいました。病まれていても熱い短歌への愛情が感じられた貴重な時間でした。コロナ禍の前に歌友の方々と御見舞した折にはもうお話は出来ませんでした。辞去する際に一人一人と握手した先生の熱い短歌への思いのこもった温かい分厚い手が心に残っています。

先生のおられない歌会ですが、時々先輩方が先生の思い出を語るのを羨ましく聞きながら、もつと早く短歌を始めたいれば先生にもつと多くの事が学べたのにと残念でたまりません。

## 誠実なる歌人の半生の歌を読む

鈴木竹志

体験の一部が詠まれるに止まっている。他の歌にも多く見られる傾向であるが、感情に動かされるのではなく、感情を抑えつつ、己の体験を静かに詠んでゆくのが、平松の作歌態度であり、この姿勢は終生変わることはなかったようだ。短歌形式に対する確固たる信念があつてこそ、作歌態度ではなかったかと思う。こ

の歌集の歌を何首か紹介する。

なきがらを葬りてならず土の上にはばるる椰子の花あたらしき

いのち生きて還らねばならぬ国土の美しくあれや草を食ぶる

小川まで飯盒を洗ひに行きし兵が飯盒にジャスミンを挿して戻りきぬ

子にはひ残る布団にねむり待つみじろぎもなさぬわれとわが妻

病む人を街に見舞ふとつね遊ぶことなき妻が明るく装ふ

四首目の歌は、長男の死に際しての歌である。詞書きには、「行年二歳」とある。家族を詠む時、平松の眼差しは限りなく優しい。戦後の厳しい生活の中で、

何度も試練に立たされるが、常にその優しい眼差しを失わず家族を詠んでゆく。

第二歌集『喜屋武岬へ』は、昭和六十二年の刊行である。歌集題にある「喜屋武岬」は、沖繩本島最南端に位置する岬であり、沖繩戦において多くの人々が身を投じた悲劇の場所である。平松は戦友

会で那覇を訪れた際、沖繩戦の跡を見る機会があつたが、このことを契機にして、

再度妻と沖繩を訪れ、激戦地を巡る旅をしたのである。このことについて、平松

は「あとがき」で次のように書く。

二ヶ月後、再び沖繩へ飛んだ。こんどは観光旅行ではなく、もう一度戦争の痕を確かめつつ自分の歌の原点に立ち返りたいという思いがあった。大勢の島びと達が集団自決したという慶良間列島の島々も、遠望できればしておきたかった。私は沖繩戦敗退の跡を、あらかじめ立てた計画に従ってゆっくり辿っていった。

鸚鵡島から帰還した後も、平松は、自身の戦争体験を引きずる中で、沖繩の戦いの跡に直面する機会を得たのだ。

吾は香を妻は夏の花一束を献じ額づく  
ひめゆりの塔に  
少女らも戦ひ死にし沖繩戦知らず飢ゑ  
ぬき南溟の島に  
夜光虫ひらめき流る怯むなく若きら死  
にし摩文仁の海を

逃げ惑ひ女ら死にき洋二つ接して荒ぶ  
喜屋武の海に

沖繩戦の跡を辿りつつ、亡き人らへの鎮魂の思いを深く抱いたのであろう。戦地より帰還して、何とか戦後を生き抜いてきた者の義務であるかのように、平松は戦跡を巡ったのだ。これらの歌は、やは

り感情を抑えつつ、そこで起きた事実と己の見たものを誠実に詠み込んでいる。

第三歌集『過ぎゆく』は、平成三年に刊行された。この歌集の多くは、挽歌である。平松にとつて、大切な二人が相次いでこの世を去り、悲嘆に暮れる中で詠み続けたのが、この歌集に収められた一群の挽歌である。一人は、平松の唯一の短歌の師宮柵二。そして、もう一人は最愛の妻佐津子である。二首ずつ挙げる。

病める師を偲びし日々もいまは過去忌  
の日も過ぎて年暮れむとす

現身を計報つらぬきしかの痛み年経つ  
つなほ身にとどこほる

ひとかけの氷ふふみて息づきし汝がい  
やはての微笑思ほゆ

吾妻はやいづべへ往きしわがめぐり手  
に触るなく声もせなくに

今回平松茂男氏の作品を読む機会を得たが、己の歌を信じ誠実に詠み続けた歌人の半生は、わが怠惰を窘め、さらに勇氣を頂いた。深く感謝したい。

なお、第四歌集『黒蝶貝の海』については編集部の高野公彦氏が作品抄をされることになっているので、ここで同氏にバトンタッチしたい。

## ●『黒蝶貝の海』抄 十首

亡き妻にピール供へむ盆の夜の死者もろ  
どものひそかなる宴

少年のわが歌を挙げ客気をはいませめ  
しき白秋先生

消しゴムもルーペも辞書も右側に置きて  
選歌す左眼病むゆゑ

海の風絶えずさわがしく吹きつけて知床  
岬は四囲白き闇

振り向けば亡き人あまた師よ妻よ幼く逝  
きし二人の吾子よ

サリンガス撒きて実現せむとせしハルマ  
ゲドンといふ地獄変

箒など墓地の隅所に立てかけてへ宮柵二  
之墓）周辺清し

黒蝶貝棲むとききつつ思へるはわが戦友  
あまた沈みある海

西行も大海人皇子も分け入りし吉野の谷  
に花吹雪浴ぶ

生きてあらば妻は嘆かむわが机側、薬袋  
薬瓶乱れてあるを

（抄出Ⅱ編集部・高野公彦）